

## 【サッチャー女史】

植山学院長、ハロー通訳アカデミー関係者ならびに生徒の皆様、私はこれまでの訪問によって、皆様方がプロの通訳ガイドを養成する日本で最大の学校であることを十分に存じております。過去7年間、毎年こちらを訪れるのを楽しみにしてきました。皆さんがこちらの学校で訓練を受けていらっしゃることをお慶び申し上げます。日本へやってくる人々が受ける歓迎や親切を見れば、それははっきり分かります。皆さんの仕事のすばらしさ、優秀性の証明ですから。

今回はいつもとは違って、最新のできごと、今、世界に影響を及ぼしていることではなく、ごく普通の生まれの私がどのようにして政治リーダーになったか、そして、国際的な出来事に影響を与えるものから、私が人生の中で学んだ経験などについて話すように依頼されています。なぜなら、皆さん、出来事というのはただ偶然に起きるものではありません。指導者の力、指導の方向によって引き起こされるものなのです。自由社会の個人や政府の指導力です。地域の指導的地位にいる人々、産業界の指導的地位にいる人々、報道関係の指導的地位にいる人々、そういう多くの人々が引き起こすのです。そこが独裁政権社会との違いです。独裁社会では、皆がすべきことを命じられるのに対して、自由社会ではほぼすべての段階で私たちに指導権があります。

私が生まれたのは、ごくごく普通の家庭でした。私が生まれ育ったのは、イングランドの小さな町です。人口25,000人ほどの町でした。たいていの人顔見知りで、ある程度に小さくて、多くのいろいろな任意組織や慈善団体があって、数多くの異なった意見に触れることができる程度に大きな町です。父は食料雑貨商でした。父は早々と14歳で学校をやめました。とても利口な子だったのですが、当時、19世紀のことですが、彼の家族は彼に学業を続けさせるだけの経済的余裕がありませんでした。皆さん、私たちの多くは、私自身も含めて、学校へ行くのを当然のことと思っていますが、前の世代の人々はそうではなかったのです。さて父は学校をやめて、食料雑貨店の奉公人になりました。彼は他人のために働くのが好きではなかったため、結局は自分で商売を始めました。私の母も、自分の仕事を持っていました。婦人服の仕立てです。つまりわが家は、家族一人一人が非常に独立していて、自分自身の努力で大きく育てることのできる何かを持ちたいと考えていました。そして猛烈に勤勉でした。両親は二人そろって非常に敬虔なクリスチャンでした。神を信じ、礼拝を信じていました。二人は教会の有カメンバーでした。そして二人はまた、社会の価値とはそこに住む市民の価値であり、自分の仕事のほかにどれだけの無給の働きを、仕方なくとか雇われているからではなく、自発的に奉仕団体を通してできるかが大切なのだ、ということ十分に承知していました。

両親はロータリー・クラブの会員でした。日本にもロータリーはあることでしょう。国際的な組織です。モットーは「他者への奉仕」です。両親は、たくさんのボ

ランティア団体に所属していました。そうした組織は英国の生活のなかの大きな特徴で、老人や問題を抱えた子どもたちを助けていました。これも、私たちの人生哲学の一つでした。私たちは自分たちの生活を築けるほど幸運なのだから、周りを見回して私たちほど恵まれていない人たちを助けなくてはならない、というわけです。

私たちは毎週日曜日に教会へ通っていました。それも通常、日に二回行きました。そしてしばしば人々を夜、家へ連れ帰って、その日一日の出来事について話し合いました。皆さん、私は今でも、1つの新しいことが起こる前のわが家の興奮ぶりを覚えています。ラジオと呼ばれる新式のものが、我が家に来ることになったのです。ラジオを新式と言うのですから、ずい分昔のことだとお分かりでしょう。家にラジオがあるということ、つまり放送を聞けるということは、かなりすごいことでした。それが、私が10歳頃にわが家にやってきました。そして当然ながら、わが家に新しい物の見方や考え方がもたらされました。なぜならラジオは多くの場合、テレビよりずっと深く考えさせるものだからです。あるいは、当時はそうだったとさえいいのでしょうか。一流の人たちがラジオで話をしていました。私たちは、彼らが意見を述べるのを聞きました。偉大な学者だったり、哲学者だったり、何かを成し遂げた、ひとかどの人物ばかりでした。談話、議論、それに「ブレインズ・トラスト」と呼ばれる(知識人の討論)番組などによって、私たちは新しい物の見方や考え方に目を開かされました。

私はごく普通の女子生徒でした。私には姉が一人いました。四歳年上です。私たちはとにかく一生懸命に働くようにしつけられました。私たちはまた、キリスト教の教えのなかで育ちました。そして小さな町では、多くの異なった団体や組織に所属するものだという考え方の中で育てられました。地元のオーケストラであったり、アマチュア演劇であったり、ディバートのクラブだったりするわけですが、そうした興味を引く組織にこそ小さな町の本質があります。中小企業の経営者が集まっている団体もあったかもしれません。時には150マイル離れたロンドンから国会議員を呼んで、話をしてもらったこともあったでしょう。こうした環境のなかで、私は育ちました。非常によい環境でしたよ。私たちは、原則の大切さを教えられました。名誉の大切さを教えられました。義務の大切さを教えられました。

父は、地方議員でした。選挙で選ばれた議員です。彼は本当にとっても聡明だったので、非常に短期間で私たちの町の財政委員会の委員長になりました。ぜひ言っておきたいのは、私たちの町では父が委員長で、無償で財政を管理していたので、赤字になることはなかったのですよ。私にとっては、政治の世界へ入る前のとても良い勉強になりました。私たちはまた、国家の域を出た義務もあると考えていました。国際的な組織であるロータリー・クラブの会員だったからです。そうなのです。私たちに地元の小さな町に対する義務と母国に対する愛国的な義務がありますが、そのほかに国際的な義務もあるのです。

学校では姉も私も、他国に文通相手を持つことを奨励されたことを私は覚えています。そのための組織がありました。私には、パリに住むフランス人のペンフレンドがいました。姉にはオーストリア人だかドイツ人だかの女友達、つまりペンフレンドがいて、彼女はウィーンに住んでいました。そして私たちは手紙の半分を自国の言語で書き、残りをフランス語かドイツ語で書いて文通していました。それらの言語は、学校で教わっていました。フランス語やドイツ語の部分を書き終えて、残りを英語で書けるというときには、皆ほっとしたものです。

さてその頃突然、1930年代の半ばから終わり頃に、父が姉のペンフレンドの父親から手紙を受け取りました。ドイツ語で書かれた手紙が、英語に翻訳されていました。あれは、1938年でした。皆さんにはずいぶん昔のことに思われるでしょうが、私の記憶の中には鮮明に残っています。きっと皆さんがもっと年を取ったとき、今年のこと鮮明に記憶されているのと同じように。その手紙には、ヨーロッパで起こった一連の出来事が書かれていました。ヒトラーと呼ばれる男、ヒトラーと呼ばれる独裁者がドイツの主導権を握ったことは、私たちもよく知っていました。彼がロータリーなどの奉仕団体をすべてやめさせたこと、奉仕団体も、対等な議論も、自由な討論もなくなったことを承知していました。そのような冷酷な独裁者が登場して、オーストリアのウィーンに進軍したのです。そこに姉のペンフレンドが住んでいたのです。彼女の父親は、事態の推移を見てきました。どうすれば一人娘により良い将来を与えることができるか？ 彼は銀行の支配人でした。彼がそこを離れることはできません。そこで彼は父に依頼の手紙を書いたのです。「もし娘をあなたの娘さんのところへ脱出させることができれば、次の段取りができるまで彼女を引き受けていただけませんか？」というものでした。父はなんの躊躇もなく、すぐにこう返事を書きました。「はい、もちろんお預かりしましょう。そうすることを誇りに思います」

そして私は全政治生活を通して、比較的小さな町の住民は、国際社会のなかで根本的に間違ったことに直面したとき、きわめて高潔で、道徳的で、最良の人々であることをよく分かっていました。ヒトラーのしていることは間違いでした。次世代を救うために何ができるか、と私たちは考えました。

そういうわけで、イーディスがやってきました。イーディス・ミルブルットといいました。彼女は私たちの家に滞在し、すばらしいロータリーの活動のおかげで、次第に私たちの友人宅に順番に滞在するようになりました。そして南米の親戚のところへ行くために去るまで、私たちと過ごしました。後にオーストリアの強制収容所について聞き、少なくとも私たちの小さな努力で、一人の人間がそこでおこなわれていた残虐行為の犠牲にならずにすんだと知って大いに嬉しく思いました。

これでお分かりいただけるでしょう。人口25,000人の小さな町ではありましたが、高潔で誠実な人々がいましたし、いまでも世界中にそういう人たちがいます。これは

宗教とも関係しています。名誉あること、真実のこと、世の中から見ても正しいこと、そうしたことを、考え行動する規範にする。そうすべきだと信じている人が大勢いるから、自由と正義と名誉は決して滅びることなく、世界の他の地域へも次第に広がっているのです。このような環境で、私は育ちました。

言うまでもなく、私は学校へ通っていました。自分で言うのも何ですが、私はとても聡明でした。それは私がというより、父から受け継いだ資質です。私たちは読むことを習慣づけられて育ちました。最近はそのほど本を読まなくなっていますね。あの当時は読書が、より多くのことを学ぶ道でした。そして毎週土曜日の朝、私は店の二階にあった自宅から 私たちは店の上に住んでいました 地元の公共図書館へ行って、本を二冊借りました。たまたま私の父は地方議員でもあり、財政委員長でもあり、同時に図書館委員会の委員長でもありました。私は図書館員に、こう言ったものです。「世界中で今起こっている事件について書かれた最新の本が読みたいので、お願いします」 そうすると、彼はそうした本を貸してくれました。また私は、美術や音楽に関する最新の本も読みたいと思っていました。なぜなら私たち家族は美術や音楽が好きでしたし、そのほかにも政治的でないものがいろいろと好きでした。毎週土曜日に持ち帰った二冊の本を家族で読んで、それについて話し合い、翌週になると返していました。読書に取って代わるものはありません。読書と勉強することは、テレビを見るよりずっと有益で、ずっと奥深いものです。実際にラジオはテレビよりずっと奥深いです。テレビは出来事を伝える映像に傾きがちで、視聴者は深く考えずに見てしまいます。ですから私たちは、これらのことをしっかりやるように教育されました。

そして日曜の午前中と夕方に教会へ行ったときに、誰か知らない人がいたとすると、戦時中でしたから、どこかよそから来た人もいましたし、あるいは軍人がいる場合もありましたが、夜、どこへも行くあてのないそういった人たちを、私たちの家へ連れて帰りました。これは、非常にイギリス的な行為でした。

さて、私には大きな志がありました。大人の会話に一生懸命に耳を傾けているうちに、さらに高い教育を受けたいと思うようになったのです。つまり大学へ行くことを熱望するようになりました。それもオックスフォードとケンブリッジという権威ある二つの大学のうちのどちらかに行きたいと思いました。それは、生易しいことではありませんでした。奨学金をもらえば行けるかもしれなかったのですが、当時は、たとえ科学系の科目を専攻するとしても 私がそうでした。私は化学、物理化学を専攻したいと思っていました。たまたま得意な学科でしたから 語学の資格も必要で、それが私たちにとってはフランス語でした。また古代の言語でも資格を取っている必要があり、それがラテン語でした。多くのヨーロッパ系言語は、ラテン語から派生しています。ところが私たちの学校では、ラテン語を教えていませんでした。そしてラテン語の試験に合格しなければ、たとえ私が研究したい科目

が化学でも、オックスフォードには行けませんでした。そこで私は男子校の校長に、個人的に教えてもらいました。彼はラテン語の達人でした。私はラテン語の勉強に励み、6か月後にはなんとかラテン語の試験に合格しました。そしてついにオックスフォードに進学しました。これは重大なできごとでした。

私の一族ではもう一人、いとこの男の子だけが大学へ行っていました。彼は私より、ほんの少し年上でした。彼は経済を選びました。お分かりでしょうか、17歳か18歳の頃は、何でも分かっている気になっているものですよ。私はあのとき、経済はごく一般常識のものだと考え、科学を専攻することにしました。

私はラッキーでした。すばらしい指導教官につくことができました。いいですか、皆さん、科学の驚異的な進歩ほど今世紀に影響を及ぼしたものはありません。物理の世界にいても　　そうそう日本には、江崎玲於奈氏という偉大なノーベル賞受賞者がいらっしやいます。江崎教授は、ノーベル物理学賞の受賞者です。私のオックスフォード時代の指導教官は、化学構造の分野でノーベル賞を受賞しました。X線結晶学的解析によって構造を研究し、最初の抗生物質の構造の解明に貢献しました。その抗生物質というのが、ペニシリンです。こうしたすばらしいノーベル賞受賞者たちとつき合うのは、非常に興味深いことでした。皆さんも日本人受賞者に強い誇りをお持ちでしょう。こうしてオックスフォードへ行きましたが、政治への興味を失ったわけではありませんでした。

暇な時間に、とはいっても科学を専攻していると、たいして暇はありませんでした。理論の勉強と実験室での実習と、両方やらなければなりませんから。それでも暇があるときはいつでも、政治に大いに興味を抱いていました。家庭では政治について話したり議論していましたから、じきにオックスフォード大学でも政治について話したり討議するようになりました。

戦争が終わりました。本当にほっとしました。そうこうしているうちに私の大学生活も終わりに近づき、進路を決めなければなりません。私は研究化学者の職を得る一方、政治に対しても大いに興味を持ち続けていました。私は、国会議員、ごく普通の下院議員になることさえ、考えませんでした。下院議員は、全部で650人です。なぜ考えなかったかという、当時、下院議員は専従ではなく、わずかな手当をもらっているだけでしたし、私は自分の生計を立てるために稼ぐ必要があったからでした。けれどもご存じの通り、戦後すべてが変わりました。皆さんの国でもそうでしたが、わが国でもそうでした。すべてが変わり、国会議員も別の仕事を持っていつつも、適度な俸給が支払われるようになりました。そこで、ええ、なんと言おうか、大きな野心を持って、おそらく少々生意気でしたが、国会議員の候補者として承認を受けようと決心しました。

さて、私たちの国では下院議員は地区を代表していて、保守党あるいは労働党を代表する地区の候補者として承認される必要がありました。私たちは保守党で、と

とても驚いたことに、私は23歳のときに非常に厳しい選挙区の候補者に選ばれました。工業の盛んな地区の議席でした。当選はしませんでした。その議席に立候補したことで非常に多くのことを学びました。

さて(咳) ごめんなさい、とても乾燥しているものですから。とてもね。皆さんもお困りかもしれないけれど、皆さんには飲む水がないわね。(笑い)

その議席を争っているころ、私は科学関係の仕事をしていました。そして選挙運動の中で、やはり塗料と防腐剤などの化学製品の仕事をしていた夫と出会いました。

落選はしましたが、その代わりに私は結婚しました。2年後に双子が生まれました。すばらしい早業で、家族ができたと思います。男の子と女の子の双子でした。

神様は私に、とてもよくしてくださったと思います。そして約6年後、私は政治の世界に戻ることができると思いました。ロンドンの地区の候補者に選ばれたからです。夫の会社はロンドンにあり、私たちの家がロンドンにあり、国会もロンドン、そして私の選挙区もロンドンでした。

ですから私にとってはすべてがうまく行き、私は国会議員になりました。私は非常に控えめな議員でした。本当に言うべきことができるまで、しゃべらないほうが良いと知っていましたから。多くの人たちは、本当に言いたいことがあるかどうかに関係なく演説します。ですから私はめったに演説しませんでした。そのおかげで演説した時には新聞で大きく取り上げられました。間もなく私が属する保守党は、もっと多くの女性を権限のある地位につけるべきだと決定しました。そこで私は下級大臣(政務次官)になったのですが、当時は女性を福祉関係の仕事につけるのが常でした。私たち女性に、産業や財政に関する仕事ができるとは考えられていませんでした。ですから私は福祉担当となりましたが、人々の苦しみについて多くのことを学び、その苦しみを軽減して、すべての人に役立つ社会保障制度を制定しようと努力できたことは、大変よい経験となりました。

その後、私たち保守党は政権を去りました。次の選挙で勝って政権に戻ると、党首が私を閣内の科学担当の大臣に据えました。科学は私の得意分野でしたし、その教育も受けていました。そしてそれから4年間で、閣内相として一人前になりました。私は議会での議論の仕方を学びました。私は議論がなかなかうまくいったのですよ。それから議会での答弁の仕方を学びました。英国の制度では、下院で各大臣が予定表に従って答弁に立たなければなりません。もしどこかの省の担当なら 私は教育科学省でしたけれど 45分間、いろいろな質問に答えなければならないのです。質問は議事予定表に載っていますから、最初の質問が何かは分かっていました。けれどもその質問者が別の質問をぶつけてくることもありますし、次の質問をしてくることもあり得ますから、どうなるかはよく分からないのです。

後に、私は首相になると 自分でも思いがけないことでしたが 首相になると、すべての省に関する質問に答えなければなりません。議会での質問がど

のようなものになるか、まったく見当が付きませんでした。なぜなら議事予定表には「本日の首相の予定について詳しく教えて頂きたい」とあります。そこで私は立ち上がって、今日やることは、これとあれとあれとで6件だと答えます。すると次の質問は 議事予定表にある質問をする人は、もう一つ別の質問をしてもいいことになっていましたから 次の質問は「首相は忙しい日程の中で、これこれを考える暇はあるのか」といったものになります。質問は何でもいいのです。工業に関するものだったり、芸術に関するものだったり、教育関係、あるいは公共医療とか社会保障だったりします。

皆さん、この世で何かをしようとするなら、どんな職業でも同じですが、慎重に詳細に準備しておくということを私は学びました。スピーチをする前、公式行事に出席する前、何をするにしても覚悟を決めて準備し、答えを用意しておくように。首相になりたての頃は 1979年に私は首相になったのですが 火曜日と木曜日が答弁の日でした。そこで直前の週の週末の約8時間をかけて準備しました。各省から、そしてそれぞれの大臣から情報を得ました。いま現在の問題は何か、彼らはどんな質問を私に浴びせて揚げ足を取ろうとするか、などを8時間かけて準備しました。しかし質問を受けるのは、それぞれの日に20分きりでした。その時間制限がありましたし、それに言うておきますが、彼らが私をやりこめたことはなかったと私は思っています。しまいには4時間で準備できるようになりました。知識が蓄積していきますからね。

そして私は女性初の首相でした。皆さん、おそらく私はラッキーだったのだと思います。女性が国民生活の中で素晴らしい役割を果たしているのに、そして皆さんの国でもそうでしょうが、戦争時に素晴らしい働きをしたのに、国会に女性の声が十分に反映されていないと人々が気づき始めたときに政治の世界に入ったのですから。ですから彼らは能力のある人を探していて、その時、偶然にも私がいたというわけです。私はこの仕事が好きでした。政治に対する情熱を持っていました。歴史が好きでたまりませんでした。よりよい未来を作ることに情熱を抱いていました。さて皆さん、私たちは幸運です。過去50年間、大きな争いはありませんでした。世界大戦が、この50年間なかったのです。今世紀前半の50年間と比べてごらん下さい。2つの世界大戦があり、戦死の率は恐ろしく高かったのです。

そこで私たちの最初の務めは、この素晴らしい平和の時代が続くようにすることでした。もちろん、地域紛争は数多くありました。その一つが、サダム・フセインのクウェート侵攻です。あのときジョージ・ブッシュと私は、彼を撃退しました。ヴェトナムでも戦争がありました。皆さん、実は約120もの地域紛争があったのです。もし皆さんが自分の国の最高権力の地位にあったとしたら、予期せぬことは起こるものと常に考えていなければなりません。誰かが必ず大規模な軍備をし、かなりのミサイルを装備するものなのです。最近では、北朝鮮から簡単にミサイルを

購入できますからね。北朝鮮からは核兵器材料も買うことができます。そうしたことが今も起こっていますし、災いがなくなることはありません。もしあなたが権力の座にいたら、予期せぬことを迎え撃つための政策を持っていなければならないことがよく分かります。サッチャー流政治のおきては、「予期せぬ事は起こるもの。だからその時に備えておくべきだ」というものです。

政治家はそうあるべきなのですよ、納税者である皆さん。私は任期中、あの偉大なロナルド・レーガンと同意見でした。彼は私と非常によく似た経歴を持ち、自由と法と民主主義に私と同様の強い愛着を持っていました。そして私たちは、世界のどこが攻撃されても守れるように、常に準備しておくべきだと主張しました。なぜならヒトラーやサダム・フセイン、あるいは毛沢東やスターリンのような独裁者は、生活水準を上げる前に軍備を増強していることを知っていたからです。

私たちは十分な防衛力を持つべきだと主張しましたが、西側の自由社会には何かがあります。皆さんは西側の一員ですが、西側には、自由な雰囲気の中で科学技術の研究などができる何かがあります。想像力を膨らませ、インスピレーションを働かせ、科学の世界で大きな進歩を可能にする何かです。その進歩のスピードは、往々にして独裁政権国家より速いものです。ですから、科学に多くのものをつぎ込むということは、人々の自由のために多くの力を注ぐということなのです。

私はかつて指導教官のもとで、これを目の当たりにしました。論理によってかなりのことができるので、私たちは論理を学びます。科学とはそうやって、論理によって推し進められるものです。数学も論理でおこないます。ですがある段階になると、論理ではそれ以上進めなくなります。それは政治でも同じです。歴史の教訓を学んだところで、前進する役には立たない。その段階になると、それまでは全く思いつかなかったアイデアや代替案や手順を、論理を超越してインスピレーションによって得られる人たちに、将来は託されるのです。その実例の一つが、私の指導教官のドロシー・ホジキンの業績です。ペニシリンという新しい抗生物質がありました。私たちは、より多くのペニシリンを得るために、これを化学的に合成できるかを知りたいと思いました。そのためにはその構造を解明する必要がありました。構造に関するすべての実験をおこないました。その物質は、それまでに分かっていた構造とはまるで一致しませんでした。実験と論理では行き詰まってしまいました。そこで、天才と呼ばれる人々が登場するのです。日本の偉大なノーベル物理学者もそうですが、音楽でも美術でも科学でも、あるいは数学でも、そういう人たちはそれまでのことを跳び越えて、思いもかけなかったことに到達することができます。それがインスピレーションです。突然に浮かぶのです。人間の頭脳のすばらしいところです。私の指導教官にもそれがあり、おかげで私たちはペニシリンの構造を知ることができました。そしてこの分野では、私たちの時代にすばらしい大進歩がありました。そうしたことが、自由社会の中でのほうが、より短期間に起こります。

ノーベル賞受賞者のほとんどが自由社会の出身なのは、そのためです。私たちは自由を当然のこのように考えていますが、おそらくそう考えるべきではないでしょう。

さて、私の人生のかなりの部分を述べてきました。そして、いまだにどうしてそうなったのかはよく分からないのですが、私は首相になりました。父はすでに他界していました。私が最初の職についたときは、存命していました。父が生きていたら、きっと誇りに思ってくれたことでしょう。皆さんが成功なさったら、きっと同じでしょう。ですが良い社会の不可欠要素は家族であることを、どうぞどうぞ決して忘れないでください。良い社会の根本は、各個人がおこなう善行なのです。

私が生きてきたなかでごく最近まで、世界には思想的な対立がずっとありました。片方は共産主義国や独裁政権国家の思想。それらの国々の国民は何の自由もなく、命ぜられたままのことをします。ソヴィエト連邦全体、中国全土、そしてそれらの代理国である他の国々のことです。これに対して、英国で私たちが戦い取った生活様式・・・自由は三本の足で支えられています。自由は、法の支配なしにはあり得ません。法の支配は、民主主義によって作られていくものです。自由と法の支配と民主主義、この三つはどれが欠けても成り立たないのです。これこそまさに、私たちが幼い頃から教えられて育ったメッセージなのです。

ではつぎに、いろいろな人物についてです。私たちは共産主義諸国と渡り合って、共産主義を打ち負かす必要がありました。なぜならその国々の人々には、将来の見込みなどまったくなかったのですから。共産主義が崩壊したとき、物質的にもその他のいろいろな意味でも貧困であったことを私たちは目にしました。そして今世紀の戦いの中で最もすぐれた戦いは、実戦によるものではなく、一発も発砲しないで勝利した戦いでした。それは西側諸国の断固たる態度による勝利でした。私たちの生活様式のほうが優れていること、そして共産主義諸国が自由と自由がもたらす生活に関する情報をいつまでも締め出したままにはできなかったという事実が原因でもありました。そしてもちろんロナルド・レーガンは、私が政権の座にあった時代の、最も偉大な人物の一人でした。

大戦中、最も偉大な人物に数えられるのが、ウィンストン・チャーチルでしょう。彼は英国の首相を務め、並外れた成果をおさめました。彼は学校の成績は決してよくありませんでした。皆さんも、学校の成績がよくなくても、心配することはありませんよ。彼は英語の達人でした。彼は人一倍の読書家でした。そしてまた、人間性を理解する天才でした。彼は今世紀の初め、みずからも戦闘に参加しました。第一次世界大戦時は海軍大臣で、海軍に関する全ての責任者でした。私も聞いたことがあります、彼は演説の名手です。彼は英語に精通していました。そしてその使い方を心得ていました。わが国がつかう厳しい重大な時期に、彼はこう言いました。「人類の戦争史上、これほど多くの人たちが、これほどわずかな人たちに恩義を負っ

たことはない」これは第二次世界大戦に関する言葉です。この大戦では、ヨーロッパ大陸の各国が敗北していました。そして私たちは孤立し、500人のパイロットと何とか逃亡してきたポーランド人パイロット数人で、ドイツ空軍を破らなければなりません。ロンドンでは3か月にわたり爆撃を受けました。500人のパイロットは昼も夜も迎撃しました。そして、どうやったのか見当もつきませんが、英国には目に見えない何かがあるとついにはヒトラーに思わせたのです。そこであのウィンストンがこう表現したのです。「人類の戦争史上、これほど多くの 全国民5,500万の 人たちが、これほどわずかな人たちに恩義を負ったことはない」彼は際立った人物でした。

彼はルーズベルトの親友であり、後にはトルーマンとも親交を結びました。二人は力を合わせました。人々は、希望を持たないといけませんからね。どんなに難しい状況でも、国民には常に希望を与えなければいけません。当時、私たちが抱いた希望とは、どのようなものだったでしょう？ まだアメリカは参戦していませんでした。その後、参戦しましたけれど。そしてこの偉大な二人の政治家、ルーズベルトとチャーチルは大西洋上の船上で会談しました。二人は、船まで飛行機で飛んでいきました。そして大西洋憲章と呼ばれるものを発表しました。これはあらゆる場所のすべての人の権利となるべきものです。信仰の自由は、自分の宗教や信仰に従った礼拝ができる、最初に保障されるべき自由です。言論の自由、これも絶対に必要です。これら二つの自由は、いわば前向きな自由です。そして恐怖からの解放。国は常に、国民を守る準備をしておくべきです。そしてその防衛力は常に最新のものでなくてはなりません。そして欠乏からの解放。私たちは、世界の中で貧困に苦しむ人々を助けなければなりません。この憲章は、先の大戦の一番暗く辛い時期に生まれました。

そして幸いなことに、国際連合が生まれました。皆さん、ぜひこれは言わせてください。私はカービー・アナン氏がイラクその他を訪問するのを見ていましたが、どんなに魅力的な言葉を使っても圧制者を負かすことはできません。もしそれができたのなら、サダム・フセインがクウェートに侵攻することはなかったでしょう。常に強力な防備体制を持っていなければなりません。強力な防備体制を持った上で、皆さんの人生哲学を貫き、暮らしを明るく輝かしいものにしましょう。そして今後の世代にそれを教えていくのです。そしてテレビやラジオの力を借りて、自由と法と民主主義のメッセージを、それらをまだ知らない国々へ広げていくことを私たちは大いに期待します。これは皆さんの世代がなすべき大きな課題です。なぜなら民主主義国家は、世界中の国々の半分以下しかないからです。世界には今現在、偉大な指導者が大勢います。ネルソン・マンデラをはじめ、多くの人たちです。指導者がいなければ、これを成し遂げることはできません。すばらしい国際的な組織もたくさんあります。私が最初に参加したのはG7(注:1979年の第5回東京サミッ

ト)でした。最初の国際的な集まりのために私は来日して、将来に影響を与え得る人々の仲間入りをしたのです。最後に、生活の質や水準は、各個人の誠実さ、道義心、思いやり、礼儀正しさにかかっています。これがお伝えしたいメッセージです。ご静聴、どうもありがとうございます。